

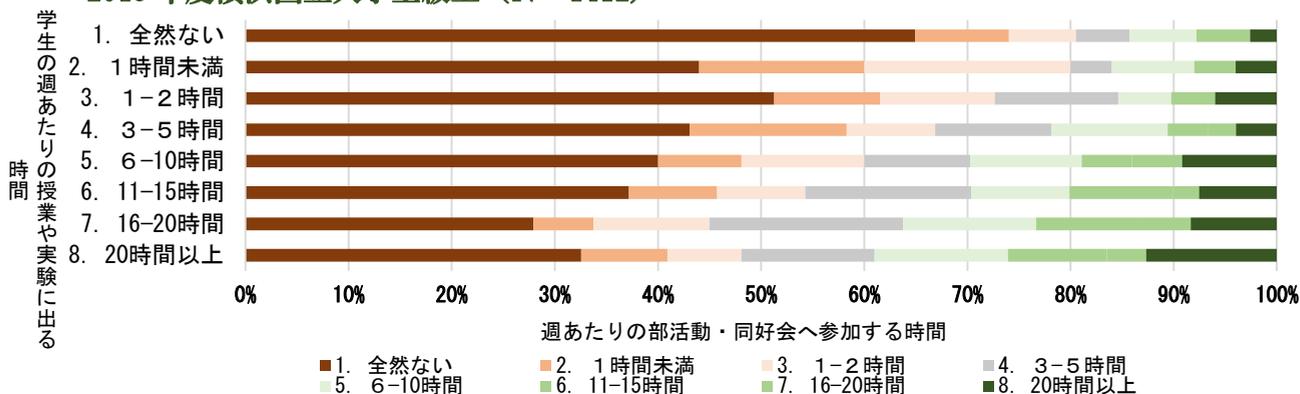
高大接続・全学教育推進センターでは、大学教育再生加速プログラムの一環として、全学部生を対象に学生調査を実施しています。この学生調査では、本学が平成 26 年度に加盟した大学 IR コンソーシアムの共通学生調査票を用いて、授業内外での学修経験や能力、知識の変化度合い、教育内容の満足度などを学生に自己評価させ、その結果を踏まえ大学教

育の成果を測定しようとするものです。教育内容の特徴を把握・分析することで教育の質を客観的に保証するとともに、更なる教育改善の方策を見出すことを目的としています。

学生調査の結果から見えてきたこととして、本稿では単位の実質化の観点から学生の授業外学修に焦点を当てて、特徴的なデータを抜粋して紹介致します。

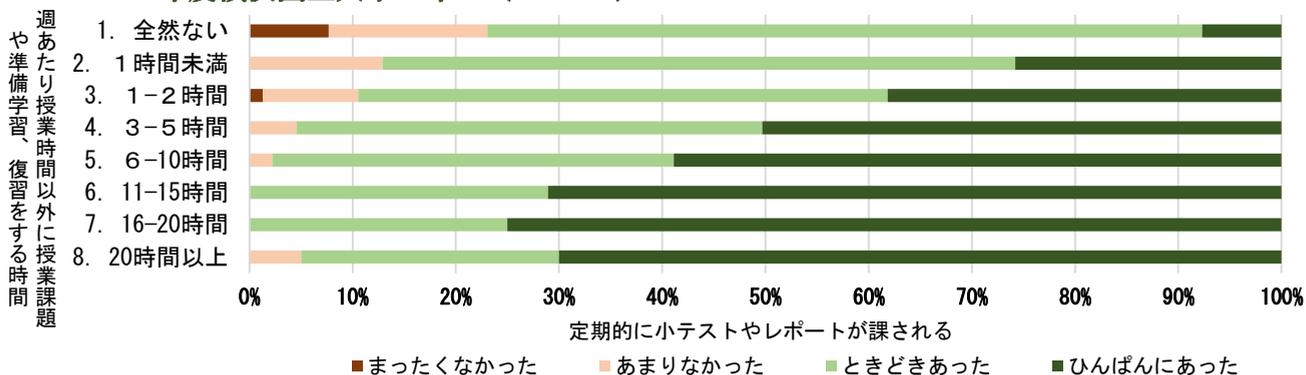
① 週あたりの授業や実験に出る時間と、週あたりの部活動・同好会に参加する時間のクロス集計

2015 年度横浜国立大学上級生 (N=1412)



② 週あたりの授業外学修時間と、定期的に小テストや課題が課される経験のクロス集計

2015 年度横浜国立大学 1 年生 (N=433)



①の結果から、上級生で授業や実験に出る時間が長い層の学生は、部活動・同好会への参加時間も長く、授業や実験に出る時間が長い層はその逆の傾向が見られます。このことから、授業や実験にもあまり出ていない、部活動やサークル活動といった課外活動にもあまり参加していないという、学修にも学生生活も不活発な学生に対して、主体的な学修を促すためのアプローチが必要と考えられます。

また②の結果から、1年生では定期的に小テストやレポートが課される学修経験が多いほど、授業外学修時間は増加してい

る傾向にあることがわかります。上級生においても同様の傾向が見られました。授業外学修時間が短い学生層は、レポートや小テストなど課題が少ない科目を中心に履修している傾向にあることも可能性として推測できます。なお本調査における他の分析結果からは、部活動・サークルや学外でのアルバイト、仕事に使う時間の長さによって、授業外学修時間の多寡には関係があまりないことがわかりました。このことから、学生の授業外学修を促すためには、授業において定期的に適切なレポートなどの課題、テストを設定し、実施することが重要であると考えられます。